

哲学思索と現実の世界

編
作博事夫
喜昭克
藤藤口澤
工齋澤米



創文社

〔哲学思索と現実の世界〕

一九九四年三月一五日 第一刷印刷
一九九四年三月二五日 第一刷発行

定価一〇三〇〇円
(本体一〇〇〇〇円)

編者

工藤喜博
齋藤博

澤口昭夫

米澤克夫

発行者 久保井浩俊

印刷者 中内康児

発行所 株式会社 創文社

本社 102 東京都千代田区一番町一七一三
仮事務所 112 東京都文京区関口一四四一七

電話 〇三三三三五一四三六一
振替 東京二九二四七二

編者との申し合せにより検印省略

曉印刷・鈴木製本

ISBN 4-423-10092-4

Printed in Japan

序

一昨年、古稀を迎えたころ、記念祝賀会を催したいとの話が、工藤君のほか当時はまだ健在であった澤口昭事君をふくむ諸君から寄せられました。私はその御厚意に感謝しましたが、祝賀会よりも有志の寄稿による哲学論集の上梓の方が有意義ではなからうか、と自分の思いを披瀝し、協議の必要があれば意見を述べさせていたただくとしても、その他のことは一切お任せすると告げました。この意向はそのまま受け入れられて、ようやく本書が実現することになりました。工藤、齋藤、米澤三君の並々ならぬ御労苦に対してはもとより、出版を快諾された創文社の御好意に厚く御礼を申し上げます。

馬齢を重ねるにつれて、哲学の難しさを改めて思い知らされるというのが、最近の私の心境であります。思い切って哲学を離れ、どこか別の領域に身を置くことはできないものか、などと自問したくもなるわけですが、そんな場所がどこにもないことは言うまでもありません。とにかく私は、半世紀近く哲学的遍歴を行い、その過程において、自分なりにいくつかの哲学的命題を提唱してきたつもりですが、今になってそれらの命題を吟味してみると、実のところ、そのいずれも、仮言的命題の域を超えていないように思われてくるのであります。しかしそれと同時に、ヒュポテシスの語には「下に置かれたもの」という意味のあることにも気づきます。この事態は、哲学そのものの命運に関わる、重要な問題を示唆しているように見えます。

哲学の成立する真実の根拠を考えると、それはまさに「根拠」であるが故に、本来、定言的に表現し、確

定できないものであって、私の心のゆらぎもまた、そこに起因するのではないかと思われれます。現実の世界は、そういう意味での根拠すなわち根底にある何ものかとして、非決定の世界にほかなりません。しかし、そうであるからこそ哲学は、その世界根拠に敢えて挑戦し、足場を索め、そこに屹立しようとする、徹底して根源的かつすぐれて人間的な学問とならなければならない、とすることができるとしよう。

本書の書名について、たまたま私見を求められましたので、私はふと思いついた仮称を答えておきましたが、あとになって考えてみると、その名称は、右に素描した世界観を反映していたように思われます。さらに適切な書名があれば、訂正改善して欲しいとお願ひしておいたのですが、そういうこともなく、遂に仮りの名称が実名となりました。ここに御寄稿いただいた各位に対して、深甚の敬意と感謝の念を表するとともに、結果として、各論文の真意を軽視あるいは曲解したのではないかと、の惧れがあることを憂い、私のとった高踏的措施について寛恕を請う次第であります。

なお、本書に加えていただいた拙論は、当然末尾に付くべきものですが、巻頭に配置されました。まことに望外の余慶と申さねばなりません。

一九九三年十二月十日

永井 博

目次

序	永井博	i
---	-----	---

行為の個性と普遍性	永井博	iii
-----------	-----	-----

——実践哲学的展望——

歴史哲学における民族主義の視点	飯塚勝久	iv
-----------------	------	----

存在していない哲学への眼差し	増成隆士	v
----------------	------	---

——哲学の分類から——

「根源的・包括的」学問としての形而上学	山脇直司	vi
---------------------	------	----

——その盛衰と復権への途——

*

クザーンヌス哲学における宗教寛容の思想	八巻和彦	vii
---------------------	------	-----

スピノザの実在観と認識	工藤喜作	viii
-------------	------	------

へであるゝこととへすべきであるゝこと	齋藤博	ix
--------------------	-----	----

——スピノザの思索において——

『純粹理性批判』の成立過程をめぐって	澁谷久	x
--------------------	-----	---

『純粹理性批判』における歴史の問題

福谷 茂……………二五

観念論と実在論

笹澤 豊……………二七

——カント哲学再解釈の試み——

ハイデッガーの思惟におけるライブニッツ受容の展開

酒井 潔……………三〇

後期ウイトゲンシュタインの核心

黒崎 宏……………三三

——事象から文法へ——

根元的規約主義の立場

栗原 靖……………三六

ウイトゲンシュタインの意志論とその意義

米澤 克夫……………三七

「批判的合理主義」再考

立花 希一……………四〇

抽象的人間——理想化とその制約

神山 和好……………四三

ホプキンズのパルタニデース論

西勝 忠男……………四七

——“インストレス”から“インスケイブ”へ——

集合・論理・無限

中戸川 孝治……………五五

——超限回帰による順序数の導入について——

子どもにおける対象観念の成立について	島 雄 元……………五七
日本人の倫理感試論	豊 福 英 利……………五二
あとがき	工 藤 喜 博……………六五 齋 藤 昭 夫……………六五 米 澤 克 夫……………六五

哲学思索と現実の世界

行為の個性性と普遍性

——実践哲学的展望——

永井 博

筆者は現在、理論哲学から進んで実践哲学の考察に移り、そのあるべき形を模索しつつあるが、本稿は、今までに得られた成果の一部である。「哲学原理の探究」を副題とする前著『人間と世界の形而上学』（一九八五年）において達成された筆者の立場は、究極的實在を、隠れた、非決定の實在とする無名・無形の実在論とでもいうべきものであった。学問を含めて人間のすべての知的営みは、この實在に対する人間の態度決定によって成り立つ。しかしこの決断は、その深底において、すぐれて実践的性格をもつ。

この事態に関わる議論は、いわゆる形而上学としての哲学と呼ぶよりはむしろメタフィロソフィーと称すべきものとされた。それが、無名・無形の実在論にはかならない。この種の実在論が、やがて実践哲学の端緒となり、求めらるべき倫理・道徳学の展開を促す理由は、ここにある。あるべき実践哲学の原理を求め、その輪郭を素描しようとする試みは、こうした展望のもとに着手されたのである。研究は未完ではあるが、この度、機会を得て成果の一端を披瀝し、識者の批判と教示を仰ぐことにした。

一 格率の機能

道徳とか倫理というとき、語源の詮索は措いて、日常の日本語としては、両語の間に多少ニュアンスの違いが

あるように見える。その違いについては断言できないが、強いて言えば、道徳は個人的行為の動機や結果に関わる規範を、倫理は人間の社会的公共的行為の動機や結果に関わる規範を意味するように思われる。しかし、人間は文字通りの孤独的存在、純粋な個人ではない。全く孤独と思われる人間の道徳を考える場合ですら、必ず何らかの対人関係あるいは社会との関わりが問題となるはずである。だから、いわゆる個人道徳といえども、実は単に個人だけの道徳でないことは明らかである。従って個人道徳とは、社会との関連を考慮しながら、特に個人に重点を置いて考察する道徳ということになる。逆に、倫理すなわち人倫の理法と見なされる規範も、人間集団としての社会における各個人の実践的行為に関わる以上、単に社会的関係だけを考えて個人を無視するなどというのではもとよりなく、個人をあくまで念頭に置きながらも、特に社会という人間集団に注意を向け、これに重点を置いて考察するというものである。かくして、道徳といふ倫理というも、両者の間には排他的関係はなく、その区別は相対的であり、相互に他を是認することによって道徳であり、倫理であると言うことができる⁽¹⁾。故にわれわれは、個人として、人間集団である社会に対して自己の責任を問うとともに、自己に対する社会の責任を問うことになる。その意味で道徳と倫理は、相補的關係のもとで、それぞれの規範性を發揮することにおいて通底するというのが、現実の姿なのである。ここでも、存在論的複合体の局面として、ダイナミックな道徳・倫理連合場が浮上することに注目しよう。そしてこの相補的關係はダイナミックであるから、道徳と倫理のいずれか一方を重視するのは妥当であり、しかも重視の度合いに強弱の差をつけて対処することはむしろ歓迎すべきであるが、これに反して、もし相補的關係を否認して両者の一方だけに傾斜して固執し、他方を無視するならば、道徳と倫理は共に空転して実践哲学的機能を喪失することになりかねないであろう。

上述の相補的連合を具体的に理解するには、個人の行為がいかなる原則に基づいて行われるべきかを分析する必

要がある。個人はまず、日常人として単なる人（ひと）である。しかし、その人は行住坐臥、必ずしも一定の原則に基づいて行動するとは限らない。むしろそういう原則などに構うことなく、ほとんど自然のままに生きているのが日常人なのである。ところが、日常茶飯のなかにあっても、人さまさまに、それなりの生活上の意欲的傾向があつて、おのずから格率というものが成立している場合が少なくない。それは準則と呼ばれることもあるが、とにかくゆるやかな意味での原則的な掟のごときものと言つてよいであらう。すなわち格率は、各人が日常生活のなかで、経験を通して習慣的に体得する固有の生活様式とでもいふべきものであるから、ほとんど明確に意識されないのが普通である。⁽²⁾しかし、人が識らず知らずのうちに身につけた意欲的傾向の表現として、格率は、独自の仕方で個人の行為を規制し管理するようになる。それは、個人のいわば覆面した性癖となつて働くこともあり得るであらう。しかし、当人がそれに気づくことは稀であつて、何かの事件に遭つて突然意識したり、他人に指摘されたりして初めて気がつき、われながら驚くといった場面もないとは言えまい。格率はまさに隠れた、その意味での自然的慣性的な傾向の産物にはかならない。だから、格率が単にそれだけのものではないとすれば、それは善でもなく、悪でもない。ある個人にとって、善悪以前の単に主観的かつ任意的な規則にとどまる。故に、格率が善となつたり悪となつたりする場合には、それが何らかの仕方では他の人と関わり、単なる主観性を脱却して客観性を、そして特に善となるには普遍性を獲得しなければならないであらう。

ここで想起されるのは、格率に関して述べたカントの「汝の格率が、同時に普遍的となつて欲しいと思ふことができるように行為せよ」⁽³⁾という周知の定言命法である。カントは、さらに同じ箇所で、格率と法則を区別して次のように述べているが、この区別は、われわれにとつても参考になる。「格率は行為の主観的原理であつて、客観的原理すなわち客観的法則から区別されねばならない。格率は主観の制約（しばしば主観の無知あるいはさ

らに傾向）に従って理性を規制する実践的規則（レギュラール）を含み、故に主観が行為（アクト）するときに従う原則である。しかるに法則は、すべての理性的存在に妥当する客観的原理であり、理性的存在がそれに従って行為（アクト）すべき原則すなわち命法（インペラティブ）である。⁽⁴⁾

カントの定言命法の教えは、極めて厳粛である。その嚴格主義には、畏敬すべき尊厳性のあることは否定すべくもないが、それほど厳しく考えなくとも、人間的行為の格率に、何らかの客観性と普遍性を求めようとする必然性の内在することは確かであろう。個人としての人間は、単独には存在せず、つねに他者（人）の格率と自己の格率との間に通約可能な、公約数のごときものを見出そうとする。その意味では、格率はすでに何らかの程度の法則性を先取りしていると言うこともできる。すなわち、この公約数に相当する、格率の準公共性あるいは準公共的格率ともいふべき規範に適合するとき、行為は初めて善とされ、それに背反する行為は悪とされると考えてよいであろう。ここで「準」というのはなぜかといえば、格率の完全な公共性などというものは、現実には望み得ないからである。格率が完全に公共的となり、またはさらに拡張されて普遍的法則と一致したとすれば、それはもはや格率とは言えないであろう。いずれにしても、個人的とされる格率が全く個人的であることはなく、それは本性上つねに公共化されることを求めており、日常生活のレヴェルにおいては、漠然としてはいるものの、善悪の基準は、このようにして設定されると見ることができよう。孔子が「己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ」と論じたのは、⁽⁵⁾格率のこうした公共性を、日常的行為の規範として定立したものと理解されるのである。

行為の格率は、単に自己中心的に為された行為を正当化する目的のためだけに設定されるのではない。それを自己の行為の格率として選択し措定すれば、自己はすでに、自己自身を超出した「原則的なあるもの」に関与し

たことになるからである。だからこそ格率は、個人の行為を制約する規範性を發揮できるのである。しかし多くの場合、その「あるもの」は、実は隠れた規則あるいは規範らしきものであつて、普遍的法則として確定した定言的命法という、歴然たる形でわれわれの意識にのぼることはほとんどないと考えなければならない。道徳律（法則）の実践的普遍妥当性を信じ、これを絶対視したカントも、その形式的規範性を詳論はしたが、実効性と具體的内容については十分に述べていないように思われる。

現実的行為そのものについて考えてみると、われわれは、各自の格率の公共的適合性を明晰に認知し、然る後にそれに従つて発動するという場合は、極めて稀である。むしろ多くの場合、行為が行われた後になって、果してそれで善かったかどうかを反省する段になって初めて、自己の格率の公共的適合性に関する意識が、意識の深層から浮上して形をなすというのが真相であろう。そしてその際、格率の規範性・拘束性を与える価値体系も確認、固定されるのである。のみならず、ある価値体系を強調し、その客観的妥当性を極限まで推し進めて実体化すれば、倫理学でいう徳目のごときものが設定され、それが不動の価値体系として、逆に各個人に服従を強制し、道徳律のくだす定言命法の権威が確立することもあり得る。そうなると、道徳律は、普遍妥当的価値体系の表現として、アプリアリかつ自体的に存在する法則と見なされ、独り歩きを始め、普遍的・自体的規範に服従せよ、という定言命法の発令者として、すべての人間、すなわち人類に君臨することになる。実践理性が人間の本性であると認定されて際立つのは、この段階においてである。しかし、この道徳的・倫理的現象の構造は、もう少し詳しい説明を必要とする。

アプリアリな客観的規範が、人間の実践的行為に対して、事前に出来上つた恒常的・絶対的原理が与えられているという命題を正当化するには、何らかの形で超越論的立場を取らなければならないが、合理的に考えようと

するかぎり、そういう立場はさらに再び正当化を求めるから、結着せず、いずれは神秘主義に救援を求めざるを得なくなる。神秘主義にはもちろん、さまざまな形態があつて単純ではなく、ある形態の神秘主義を否認すると、その隙を狙つて別の神秘主義が取つて替るといった場合もある。しかし、神秘主義はどんな形態を取るにせよ、原則的に何らかの超人間の原理を前提し、許容する点では共通している。そして人間的立場に立つという、まさにその理由によつて、前提された超人間の原理にあくまで反抗しようとする人間的努力には限界がある。神秘主義への依存は、そうした限界の裏返しの特徴と見ることが出来る。この事態は、実践的人間が徹底して人間的であらうとするとき、反転して神秘主義のごとき超人間の原理を求めざるを得ないという事実が暴露されることによつて立証される。

しかしひるがえつて考えてみると、超人間的な、その意味でのアプリアリな原理を定立するのは、依然として、ほかならぬ人間自身であるから、アプリアリな原理、具体的にいえば超越論的価値体系を、客観的・自体的原理として是認し、それに全面的に服従するとすれば、かえつて価値体系本来の意義を誤認することになる。そこで、特に留意すべきは、この事態の根底に人間的から超人間的へ、逆に超人間的から人間的へ、という循環が成立しており、しかもこの循環は一回だけで終ることなく、必要ならば何回でも繰り返され得るということである。その可能性は、人間としての自己の行為を内省すれば察知できるはずであつて、この経緯は、人間の不可避の命運とでもいふべきものである。この反復する循環に直面するとき、それは人間にとって不本意なディレンマでしかないように見える。しかし、当面するディレンマを単に否定的に受けとめればその通りであるが、肯定的に受け入れるならば、同じディレンマが、かえつて積極的に人間を真に実践的たらしめる活力となる。のみならず、ディレンマに秘められた、この種の積極性の承認は、人間的なものと超人間的なものととの相補性を立

証し、存在論的に異質の二つの契機を統合する連合場のリアリティーを示唆するであろう。

実践的人間は、しばしばディレンマに陥る。J・P・カースは、アリストテレスは形而上学の枠組のなかで自由を位置づける際にディレンマを発見したが、これは怪しむに足らないことだとして、次のように述べる。「人は、有徳の行為を自由に、それが有徳であることを知ったうえで行うのでなければ、有徳とはいわれない。たとえば、子供はどんなに立派な行為をしたにせよ、自分の行為と事柄の本質を十分わきまえてはいないという理由だけで、有徳ではない。理性とは、事象が因果の系列のなかで、本来の目的を目差して順次に継起する過程と同義であるとするならば、われわれはある種の決定論に入り込んでしまえばかりか、もっと困ったことになる。すなわち、精神にとって理性的なことが、自然にとって必然的であると思われるのである。立候補者Aが明日の選挙に勝つということが理性的であるのなら、Aはその選挙に必ず勝つにちがいない。とすると人間的自由のすべての可能性を押し流してしまうから、知的な理性と物質的な必然との結合が強すぎるあまり、精神は因果の潮に押し流される一つの物でしかないとする、唯物論者の立場と同じことになる。アリストテレスは、自分の思想のうちにこうしたディレンマを見たが、事実上、それを解決しなかった。」⁽⁶⁾ 理性の自由と自然の必然に関わるディレンマは、アリストテレスの形而上学的目的論にとって、難問にとどまったというのであろう。これは言うまでもなく、実践哲学の最も重要な、しかし手強い問題の一つであるが、ここでは参考までに、実践的人間が直面するいくつかのディレンマのなかの、もう一つの典型的事例として指摘するにとどめる。

われわれの問題は、各個人の実践的行為にとって直接に重要な意味をもつと思われる格率と、それがもつべき本来の機能についてであった。しかし、格率は一体、どこに由来するのであろうか。格率は個人にとって、何の基盤もなく出現するものではなく、主として当人の無意識の深層から生ずる。その深層には、その人にとって固